様式１

論　文　要　旨

学位論文題目：　白隠の修行観

氏　　名：　小濵　聖子

白隠は中国禅で行われていた公案修行を取り入れて、日本臨済宗を中興した人物と言われる。そうした彼の思想について、これまで中国禅との関連は指摘されているものの、その著作を読解して証明することは余りされておらず、研究途上にあるといえる。本論文は、そうした白隠の思想研究に資し、白隠の著作の読解を通して、その思想的な特徴を中国以来の禅の伝灯を意識しながら主に修行観に即して考察するものである。全体は二部構成とし、第Ⅰ部は二章構成とし、白隠における修行の体系的な一面について考察する。第Ⅱ部は第三章から成り、ここでは「伝法」という概念に着目して、報恩や戒といった仏教上の重要概念をめぐる白隠の思想的な特徴を考察していく。これら全体を順番に説明すると、次の通りである。

第Ⅰ部第一章では、仏教および禅の伝統的な流れのもとでの白隠の思想の位置づけを確認する。白隠の思想の中心にあるのは見性（さとり）である。見性とはゴータマ・ブッダのさとり、つまり縁起の自覚であり、ものごとの本来空であることの体得を意味するものであって、７世紀の中国唐代禅の特に六祖慧能によって著されたといわれている『六祖壇経』以来見性という語で表現されるようになった。白隠における見性もこの空のさとりにほかならないことが、著書『息耕録開筵普説』によって確認できる。

ところで、白隠がさとりを見性という語で表現していることは、彼が初期の中国禅からの伝灯を強く意識していることを意味する。そのことを示すのが、白隠の著書『四智弁』である。これはさとりを仏の四智（大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）のはたらきにたとえて、その智慧を証得するための修行を「見性体験」「観照三昧」「公案参究」「末後の一句（一転語）」として体系的・段階的に説いたものである。注目すべきは、これが禅の初祖達磨より重視されている『楞伽経』と構造的類似関係を持つことである。第一章の後半は、その『楞伽経』と『四智弁』との関連性を示し、禅の伝統と白隠とのつながりを述べるものである。そして続く第二章で『四智弁』の読解を行なう。この読解によって、『四智弁』は構造面だけでなく、その表現においても禅の伝統的な思想、たとえば十牛図や公案などをかりつつ、独自の「四智」の概念を形成し、白隠の修行観の全体像を簡潔にあらわしたものとなっていることを明らかにする。

以上の第Ⅰ部では、白隠の修行観をめぐって、禅の伝統や修行体系ということに着目して全体的に論じている。この伝統を引き継ぐということへの意識は、白隠において特に強かったと考えられる。というのも、白隠には同時代における仏教の衰退への危機感、厳密には退廃的な禅の修行者に対する批判意識があり、それが白隠をして過去の伝統的な仏道修行に目を向けさせたと考えられるのである。そこで、以下の第Ⅱ部では、「伝法」というテーマを設け、白隠が仏法を継承することを修行上どのように捉えて

いたのかを考察する。特に、報恩、戒、及び禅と念仏との比較という視点から三章に分けて論じる。

第三章では、「伝法する者」としての修行者を白隠がどう捉えているのかを、彼の著書『息耕録開筵普説』を再び取り上げて、その読解を通して考察する。白隠によれば、伝法することとは仏への報恩を行なうことである。仏教では仏恩に報ずることが究極であり、これはありとあらゆるものに対して仏法を教えることである。白隠の『息耕録開筵普説』では、これは禅者が一転語（さとりのことば）によって他者へ仏法を伝えることであるとされる。一転語の重視自体は白隠に限るものではないが、それを伝法と結びつけている点に白隠の独自性が見られるのである。

第四章では、「伝法される側」としての修行者について、受戒というテーマで論じる。ここでは白隠の『寒山詩闡提記聞』の中に記された、彼自身の受戒をめぐる記述を取り上げる。それによると、白隠の受戒は具足戒と無相心地戒の二種類があり、前者は外的行為に関し、後者は内的心に関する戒であるといえる。いずれか一方に偏らず、二者を護持することが修行であり、嗣法のあかしであると白隠は捉えているのである。

最後の第五章では、白隠が何故仏教のなかでも禅を修したのかという問題について、浄土教との比較思想的手法を用いて考察する。具体的には白隠の念仏批判を通じて彼の禅思想の特徴を示し、それが伝法と深く関連することを明らかにする。従来、白隠の念仏観については、仮名法語『遠羅天釜』続集内の禅浄一致論が着目されがちである。しかしながら、『遠羅天釜』続集は一般向けに著された方便的意味合いの強いものであり、より専門的で修行者向けの『息耕録開筵普説』には、明らかに念仏よりも禅の修行を専らとすべきことが推奨されている。その理由として、個人の浄土往生を願う念仏と、伝法を重視する禅との差異があり、これが白隠に禅を選択させたと考えられる。

このように、白隠は修行を通して会得される見性（さとり）を、修行者個人のものにとどめずに、他者からの伝法、また他者への伝法と結びつけて、その伝法によって証されるものであるとしている。それは見性と伝法とは等しいということであり、つまり修証一等であるということである。そして白隠の修行観がこのような修証一等の思想に基づいて展開されているものであることを示し、またそれが伝法と密接に関係していることを論じている点は本論文の独自性であり、特に中国禅との比較思想的手法を用いている部分はこれまでの白隠の思想研究にはないものであり、先進的な研究であるといえる。

以上